



左端より武田氏、関根氏、小山氏、廣瀬氏、岩井氏、小川氏、野村氏

ら大きな役割を担っていたことを示された。また、なかなか知ることができない開発途中の裏話は、非常に興味深いものであった。小山博史氏は医学において展開されるVRの様々なアプローチについて話され、医療分野とVRの関係について示して頂いた。医学と工学の両方がわからないと、この分野ではやれないという言葉が印象的であり、今後、若手の方がたくさん活躍されることを願わずにはいられなかった。そして、関根千佳氏には、ユニバーサルデザインからVRを見る視点を示して頂いた。ユーザーが使いやすいものを考えて作るということは、当たり前である反面、非常に難しい。それを多くの方とともに探求してこれ、その経験から、いくつかの提言がなされたように思う。特に「10年後になっても使えるIT」という言葉は、技術者も考えなければならぬことだろう。

最後に、特別講演をされた岩井俊雄氏と小川克彦氏とともに、VRの未来について討論が行われた。VRが活躍できる場をいかに広げることができるかが、テーマであったように思える。特にパブリックスペースとVRの連携は、困難な点が多々あるにしても、一つの進む方向であると思われる。以上のように、このパネルディスカッションはVRを立体的に知り、深く考えることができたという点で、はじめに述べたように大変有意義であった。参加されなかった会員のみなさまは残念というより他ない。

■次回大会長挨拶

鈴木陽一

第11回大会長（東北大学）

第10回大会は、活発な研究発表、展示会、カルチャーツアー、ラボツアー、二つの特別講演とパネルディスカッ

ション、そして懇親会と全ての企画が大成功のうちに幕を閉じた。まさに第10回を飾るにふさわしい充実した内容だったといえよう。

次回、第11回大会は、バーチャルリアリティ学会の第2ディケードの幕開けとなる大会である。この大会がみちのく仙台で開催されると聞いて、「東北で?」と思われた方も少なくないように思う。

たしかに、過去、バーチャルリアリティ学会における東北地方のプレゼンスはあまり高くなかったといえよう。しかし、当地でも、東北大学と東北学院大学を中心に、いくつかの研究グループが活発に活動している。次回の大会は、これら仙台在住の会員がこぞって実行委員として参画して運営されることになる。

会期は2006年9月7日(木)～9日(土)、また、場所には、地下鉄旭ヶ丘駅に隣接した仙台市青年文化センターをあてることとした。(ちなみに、仙台の地下鉄は一路線のみであり、旭ヶ丘駅は仙台駅から北へ6駅、10数分ほどの位置である)。

とはいえ第10回の圧倒的な成功の後、いかにも荷が重いというのは率直な思いである。しかし、我々はこの機会に、仙台(東北)にもバーチャルリアリティの研究がしっかり根付きつつあることを会員のみなさんになんとか示したいと考えている。そのため現在、吉澤実行委員長(東北大学)の下、学会本部と前回実行委員各位の助言を得ながら、実行委員一同、鋭意企画を進めている。

第10回大会にあたり、館先生は「僕」という国字を提案された。この新字、私は大賛成である。この字により、これまでの隔靴搔痒感は完全に払拭されるだろう(しかし、よくこんなことを思いつかれるものだなあと感服することしきりである)。

来る第11回大会が、「僕現実」を僕現するため、ささやかではあっても、新たな第一歩となれるよう、鋭意準備にあたっていきたい。

仙台は豊かな食材のある街でもある。どうぞ仙台へ、我々一同、皆様のご参加を心からお待ちしています。